

『文章指南』は帰有光の著作に非ず

——呂祖謙『古文關鍵』との比較から——

鷺野 正明

はじめに

明の帰有光（一五〇六—一五七一）には多くの著作があり、張傳元・余梅年著『明歸震川先生有光年譜』⁽¹⁾には三十五種の著作を載せている。その一つに『文章指南』（以下『指南』）があり、手稿本なるものも台湾の中央図書館に蔵されている。

ところが、この『指南』は、帰有光に関する墓誌銘や史料に触れられることもなく、⁽³⁾『四庫全書總目提要』（以下『提要』）では、『指南』はもともと書名もなく、帰有光の原刻本ではない、手稿本ですらなお全く帰有光の旧著のままではないと、⁽⁴⁾帰有光の著作とすることを否定している。

『指南』が清代桐城派隆盛のなかでどのように扱われてきたのか甚だ興味のあるところではあるが、近年では呂新昌氏が『提要』の説に對して、まったく根拠のない説であり、帰有光は安享で二十年以上講学しているので、『指南』は講学の教本であったに違いなく、たとえ

帰有光が手ずから著わさなかったとしても、少なくとも学生が記したものであり、しかも内容は有光が講義したものであるから、帰有光の著作である、⁽⁵⁾と反駁している。これは、裏を返せば、手稿本がある以上、『指南』は帰有光の著作である、ということでもある。

『提要』と呂氏の説は、「著作」をどう捉えるかにかかっている。手稿本とされるものが本当に帰有光が自ら書いたものであれば問題は無いが、すでに『提要』のように旧のままではないと否定するものがある以上は、手稿本そのものについてその内容面から改めて検討しておく必要がある。

内容の検討には、呂祖謙の『古文關鍵』（以下『關鍵』）を利用する。『指南』は、巻頭に「総論看文字法」「看歷代名家文法」「論作文法」「論文字病」があり、それを承けて「古文」の例文が編まれているが、この巻頭部分が呂祖謙の『古文關鍵』と構成・内容ともほとんど同じなのである。⁽⁶⁾『指南』だけを見るならば、帰有光の『指南』としての完成度を称することができるが、『關鍵』と比べることによって、今

度は『指南』の杜撰さが明らかになるのである。

『指南』は、帰有光の講義録等をもとにしていることは間違いないが、巻頭部分の杜撰さから、帰有光自身が『指南』を執筆編纂したとはとうてい考えられない。著作とは著者が自ら執筆編纂したものとするならば、『指南』は帰有光の著作ではない。手稿本も、恐らく帰有光の真筆ではないであろう。

なお、『関鍵』の版本は清朝にはすでに明刊しかなかったようで、日本には嘉靖壬戌四十一年（一五六二）の刊本が静嘉堂文庫に所蔵されている（以下、静嘉堂本と称する⁸）。日本現存の本では他に、文化元年（一八〇四）の官版「宋の蔡文子注・清の徐樹屏考異」本⁹がある（以下、徐樹屏本と称する）。台湾廣文書局印行本もこれである。さらに時代が降ると、清の同治光緒の間（一八六二～一八七四、一八七五～一九〇八）の『金華叢書』本¹⁰がある。本論では特に断らない限り徐樹屏本を用いる。

一 「関鍵」と「指南」の構成

『関鍵』と『指南』は、文章を構造的に分析評論するという方法論が同じせいか、全体の構成も同じである。ただ『指南』に「論文章體則」のあることが異なるだけである。

(A) 『古文関鍵』	『文章指南』
目録	目録
* 巻頭部分	* 巻頭部分

論文章體則

古文選

古文選

『関鍵』は韓愈・柳宗元や宋代の作家を対象にし、『指南』は明代までの著名作家を対象にしている。それ故、目録と古文選はその作家数と作品数が異なり、また分類の仕方も異なる¹¹。これは、宋と明という時代の隔たりがあり、成書の年代が違うので当然のことである。構成は偶然同じになったと考えられないでもないが、しかし、帰有光のように一家言を持つ文学者の著作が、前代のものと構成が全く同じというのは、常識では考えられない。

後述するように『指南』の草稿は帰有光が進士に合格する六十歳には存在したらしいが、『関鍵』の静嘉堂文庫に所蔵されている明刊本が嘉靖四十一年（一五六二）帰有光五十七歳の時に出版され、またすでに全体の構成が（A）のようになっているので、『指南』を真似て『関鍵』が出版されたとは考えられない。帰有光が『関鍵』の出版に関わっていたならば問題はないであろうが、静嘉堂本の孫応鰲撰「刻古文関鍵叙」を見る限り、それはない。

『関鍵』と『指南』は全体の構成が同じだけではなく、「* 巻頭部分」も全く同じである。「* 巻頭部分」は以下のようになっている。

(B) 『古文関鍵』	『文章指南』
總論看文字法	總論看文字法
看韓文法	看歷代名家文法
看柳文法	春秋左氏、漢司馬氏、班氏

看欧文法	唐韓昌黎、柳柳州、
看蘇文法	宋歐陽氏、三蘇氏
看諸家文法	明王陽明
論作文法	論作文法
論文字病	論文字病
『關鍵』の「看」文法は、『指南』の「看歷代名家文法」に相当する。評論される作家は、成書後の者は当然扱われないので、二書では数量ともに異なる。『關鍵』の「看諸家文法」には、曾鞏、蘇轍、王安石、李廌、秦觀、張耒、晁補之が評論されている。	
「總論」「名家文法」「作文法」「文字病」という構成は、項目の立て方が多少異なるものの、二書ともに同じとみてよい。	
更に二書は、構成が同じだけではなく、「總論看文字法」「論作文法」「論文字病」のそれぞれの内容も、全く同じなのである。『關鍵』と『指南』の「總論看文字法」を見てみよう。表現の異なる部分には傍線を付ける。異体字はとくに注記しない。まず『關鍵』。	
學文須熟看韓柳歐蘇。先見文字體式、然後徧攷古人用意下句處。	
蘇文當用其意。若用其文、恐易厭人。蓋近世多讀故也。	
第一看大槩主張	
第二看文勢規模	
第三看綱目關鍵	
如何是主意首尾相應。如何是一篇鋪敘次第。如何是抑揚開合處。	
第四看警策句法	

如何是一篇警策。如何是下句下字有力處。如何是起頭換頭佳處。如何是繳結有力處。如何是融化曲折剪截有力處。如何是實體貼題目處。

『指南』では次のようになっている。

學文須要熟讀韓柳歐蘇。先見文字體式、然後徧考古人用意下句處。蘇文當用其意。若用其文、恐易厭人。蓋近世多讀。

- 第一看大概主張
- 第二看文勢規模
- 第三看綱目關鍵

如何是主意首尾相應。如何是一篇鋪敘次第。如何是抑揚開合處。第四看警策句法

如何是一篇警策。如何是下句下字有力處。如何是起頭換頭佳處。如何是繳結有力處。如何是融化曲折剪截有力處。如何是實體貼題目處。

異なる部分を対照し、それぞれについて考察してみよう。

『關鍵』

- ①學文須熟看韓柳歐蘇。
- ②蓋近世多讀故也。
- ③如何是融化曲折剪截有力處。

學文須要熟讀韓柳歐蘇。
蓋近世多讀。（「故也」なし）

如何是融化曲折剪截有力處。

静嘉堂本では①③は徐樹屏本『關鍵』と同じであるが、②は『指南』のように「故也」がない。

①三音節の「須熟看」と四音節の「須要熟讀」とでは四音節の『指

「南」の方が落ち着きがよい。「須」が「須要」の二音節になるのは、宋から明へと時代が降る過程では充分考えられ、「熟看」と「熟讀」とでは『指南』の「熟讀」の方が自然である。②には「多讀」ともあ
る。ここから『關鍵』が先にあり『指南』が改字したと考えることができよう。②文末の「故也」はなくても意味はとれる。古い表現は「故也」がなく、分かりにくいので付け足したとも考えられる。③「屈折」「曲折」は、どちらでも意味上は変わらない。

二 「名家文法」について

「名家文法」についても前節同様に異なる部分を対照してみよう。

『關鍵』

『指南』

(韓愈)

④亦學孟子

(なし)

⑤徒簡古而乏法度則朴而不文

徒簡古而無法度則朴而不文

(歐陽脩)

⑥徒平淡而無淵源則委靡不振

徒平淡而無淵源則枯而不振

④韓愈が孟子を学んだとする『關鍵』に対して、『指南』には記述がない。静嘉堂本も同様でない。呂祖謙と帰有光に文学観の違いのあ
ることは当然で、そうであれば前後の表現もまったく異なるはずであ
る。しかし、前後の文がまったく同じで、しかも徐樹屏本だけに「亦
學孟子」の文字が有るというのは、単なる版本上の問題で、徐樹屏本
のもとの版本にあったからという程度の差である。これは、次の⑤⑥

の考察からも言える。

⑤「法度が乏しい」「法度が無い」かで「朴にして文ならず」とい
う微妙な差が二人のあいだにある。前文は次のようになっている。

學韓簡古、不可不學他法度。徒簡古而乏法度、則朴而不文(『關鍵』)

無法度、則朴而不文(『指南』)

韓愈の簡古を学ぶには、法度も学ばなければならない。いたずらに
簡古であっても、「法度が乏しい」(『關鍵』)、「法度が無い」(『指南』)
と、「朴なだけで文とはならない」。法度が「無」ければ、そもそも朴
にもならないであろうから、『關鍵』のように「泛」としたほうが理
解しやすい。しかし、構文の上では、⑥の「無く則く」の形に合う
『指南』の「無」の方がよりよい。静嘉堂本は、『關鍵』と同じ。ここ
も呂祖謙と帰有光の文学観が違うことから「乏」「無」の違いがある、
と厳密に考える必要はない。単に、『指南』が、より分かりやすいよ
うに改字しただけのことと考えられる。

⑥欧陽脩では、徒らに平淡で淵源が無ければ、「委靡にして振はず」
(『關鍵』)なのか「枯れて振はず」(『指南』)なのか、その違いは大き
い。前文は次のようである。

學歐平淡、不可不學他淵源。徒平淡而無淵源、則委靡不振(『關鍵』)

無淵源、則枯而不振(『指南』)

⑤の構文が「則く而不く」の形であることからすると、⑥は『指
南』の「枯れて振はず」の方がよい。内容的にもその方がよいであろ
う。静嘉堂本は『指南』と同じである。

柳宗元に関しては異なる記述はない。しかし、蘇軾については重大な問題が指摘できる。それは、評論の内容がまったく同じでありながら、『**關鍵**』では「蘇軾」のそれとし、『**指南**』では「三蘇氏」のそれとしていることである。蘇洵・蘇軾・蘇轍の三人が同じ評論ですむはずはない。評論は次のようである。

⑦出於戰國策史記。亦得**關鍵**法。當學他好處、當戒他不純處。『**指南**』が蘇洵・蘇軾・蘇轍の三人を「三蘇氏」として評論するのは、「蘇軾」一人の評にすべきであり、『**關鍵**』の記述のほうが正しい。なお、次につづく「**論作文法**」「**論文字病**」は、二書ともに内容はまったく同じ。

以上、徐樹屏本『**關鍵**』と手稿本『**指南**』とで表現の異なる部分を摘出して比較したが、静嘉堂本と比べてみた場合、次のようにまとめることができる。静嘉堂本と同じ場合は○、異なる場合は×である。どちらがより古い表現を留めているかの判定も下に示す。

(C)		『 關鍵 』		『 指南 』		より古い表現	
①	○	×	×	○	×	『 關鍵 』	『 指南 』
②	×	○	○	×	×	『 指南 』	『 關鍵 』
③	○	×	×	×	×	『 指南 』	『 關鍵 』
④	×	○	○	×	×	『 指南 』	『 關鍵 』
⑤	○	×	×	×	×	『 指南 』	『 關鍵 』
⑥	×	○	○	×	×	『 指南 』	『 關鍵 』
⑦	○	×	×	×	×	『 指南 』	『 關鍵 』

静嘉堂本と同じ表現の方がより古い表現をとどめ、内容的にもよいことが分かる。特に⑦の『**指南**』は、三人を一つの評価ですませ、作家の個性をまったく無視したものである。作家の個性を重んじた^⑫帰有光の評論とはとうてい思えず、この一事によっても『**指南**』が帰有光の著作たり得ないことがわかる。

三 『**指南**』の「**論文章体則**」

「**論文章体則**」は『**關鍵**』ではなく『**指南**』にだけある独自のものである。その内容についてはすでに拙論^⑬で分類検討したのでいまは贅言しない。ただ、ここでは「**論文章体則**」があとに続く「**古文選**」の排列と関連のあることを指摘しておきたい。

たとえば、「**論文章体則**」の第一に挙げられるのは「**通用則**」三条であるが、のちの「**古文選**」では「**易伝序**」と「**博約説**」の題下に「**理則通用**」と記され、「**前出師表**」と「**上高宗封事**」には「**氣則通用**」、「**太史公自序**」には「**才識則通用**」と記され、「**論文章体則**」に呼応する作品であることを明示している。「**論文章体則**」は六十六則あるが、すべて同様の扱いがされている。

また、たとえば「**通用則**」の第一番目は、

文章以理爲主。理得而詞順、文章自然出群拔萃。如程伊川周易傳序、王陽明博約説、此皆義禮之文、卓見乎聖道之微者。

というものであるが、この文が「**易伝序**」のあとに、

震川云、文章以理爲主。理得而辭順、文章自然出羣拔萃。如此序、

王陽明博約說、此皆義理之文、卓見乎聖道之微者。

と、同じように記されている。他の体則も同様に古文の例文のあとに「論文章体則」が「震川」云として記される。

右の二文では、「詞」と「辭」、「義礼」と「義理」の文字の違いがある。「詞」と「辭」の違いはそれほど問題ではないが、「義礼」と「義理」は、「文章は理を以て主と為す」という主旨からすれば「義理」の方がよい。つまりここから、最初に「論文章体則」があったのではなく、古文に即して帰有光がいったことを「論文章体則」として後にまとめた、また、そのまとめは帰有光自身ではない、ということができる。

『關鍵』には無く、『指南』としての特色を有しているのは他ならぬこの「論文章体則」であるが、もっとも重要な術語を間違えようでは杜撰の誹りを免れないであろう。巻頭部分と同じように、ここから『指南』が帰有光の著作ではないということができよう。

四 『關鍵』『指南』の作品分析

「古文選」における作品分析はどうであろうか。一書に共に収載される「獲麟解」を見てみよう。資料①は『關鍵』、②は『指南』である。二書ともに、全文を段落に分け、原文の右に小字で評説する。『指南』の評説は少ないが、圈点や傍点、二重傍線が施されている。

『關鍵』は、〃〃の区切り記号によって全五段に分けている。傍らの評説は、まず

獲麟解

字少意多文字立節所以甚佳其抑揚開合只主祥字反覆作五段說

起得好——先立此一句——承得上好
麟之爲靈昭昭也詠於詩（周南）書（或作）於春秋（哀公十四年春西狩）

獲雜出於傳記百家之書（公羊傳：麟者仁獸也。騶冠子：麟者蓋元枵之精也。廣雅：麟者含仁懷義行步中規折

旋中矩謂此類也雖婦人小子皆知其爲祥也然麟之爲物不畜

於家不恆有於天下其爲形也不類非若馬牛犬豕豺

狼麋鹿然然則雖有麟不可知其爲麟也角者吾知其

爲牛鬣者吾知其爲馬（鬣音獵說文：髮鬣也。犬豕豺狼麋鹿記夏后氏黃馬蕃鬣）犬豕豺狼麋鹿

東萊先生古文關鍵卷上

兩句讀第一句長者承序前意盡
吾知其爲犬豕豺狼麋鹿惟麟也不可不知不可知則其

謂之不祥也亦宜雖然麟之出必有聖人在乎位麟爲

聖人出也聖人者必知麟麟之果不爲不祥也又曰麟

之所以爲麟者以德不以形（或有）若麟之出不待聖人則

其（或無）謂之不祥也亦宜哉（今本皆無哉字朱子本亦不用而註云或有哉字此因宋刻呂選兩本俱有哉）

字故仍之或因前有此句遂添一哉字以堅煞語之勢且重致其激昂之意○按此文或疑元和七年麟見東川公因此而作朱子云有激而托意之詞非必爲元

和獲麟而作也況李翱嘗書此文以贈陸
修慘死在貞元十八年文之作在前明矣

獲麟解 竿頭進步

韓愈

麟之為靈昭昭也。詠於詩。書於春秋。雜出於傳記百家之書。雖婦人小子皆知其為祥也。然麟之為物。不畜於家。不恒有於天下。其為形也不類。非若馬牛犬豕豺狼麋鹿然。則雖有麟。不可知其為麟也。角者吾知其為牛。鬣者吾知其為馬。犬豕豺狼麋鹿。吾知其為犬豕豺狼麋鹿。惟麟也不可知。不可知則其謂之不祥也亦宜。然麟之出。必有聖人在乎位。麟為聖人出也。聖人者必知麟。麟之果不為不祥也。又曰麟之所以為麟者。以德不以形。若麟之出不待聖人。則謂之不祥也亦宜。震川云。文章於結末處最嫌軟弱。又須要百尺竿頭更進一步。如畫工畫畫愈出愈奇。方為妙手。如此篇可以為式。

起得好 先立此一句 承得上好 此見昭
麟之為靈昭昭也。詠於詩、書於春秋、雜出於傳記百家之書、雖婦

昭處

人小子、皆知其為祥也。

と、出だしが巧妙であること、出だしの一句が以下の句をうまく導き出していることをいう。たとえば「詠於詩書於春秋」以下の文は第一句を巧みに承け、「雖婦人小子皆知其為祥也」は「昭昭」の具体例になっているという。

第二段は、麟の見分け方の難しさを明らかにする。

難

然麟之為物、不畜於家、不恒有於天下。其為形也不類。非若馬牛犬豕豺狼麋鹿然。然則雖有麟、不可知其為麟也。

第三段は、造語のたくみさ、また両句の長短のバランスのとりかたを指摘する。

造語健蘇文樂論學此下句

角者、吾知其為牛。鬣者、吾知其為馬。犬豕豺狼麋鹿、吾知其為

序前意盡

犬豕豺狼麋鹿。惟麟也、不可知。不可知、則其謂之不祥也、亦宜。

說不祥

第四段は、前段の不祥から転じて祥を説くことを指摘する。

說祥

雖然、麟之出必有聖人在乎位。麟為聖人出也。聖人者必知麟、麟之果不為不祥也。

第五段は、意が高く、「百尺竿頭一步を進」めていることを指摘する。

意高

百尺竿頭進一步

又曰、麟之所以爲麟者、以德不以形。若麟之出不待聖人、則其謂之不祥也、亦宜哉。

一方『指南』は、“”の区切り記号、または「第〇轉」の記述によって全六段に分けている。『關鍵』に比べて一段多いのは、『關鍵』の第三段落中の「不可知則其謂之不祥也亦宜」を一段として独立させているからである。段落分けの違いには、評者の独自性があらわれる。『指南』の特色である傍点は、「皆知」「不可知」「必知」と「祥」「不祥」に、二重傍線は「形」「聖人」「徳」についている。『指南』はこれらをキーワードとして読み解いている。

『指南』でいう第一轉、つまり第一段落から、キーワードを軸にまとめてみよう。

第一段 麟が「祥」であることを「皆知」っている。

第二段 しかし、麟は家に飼われるわけでもなく、天下にいつもいるとも限らず、たとえばたとしてもその「形」がどのようなものか判別することはできない（「不可知」）。

第三段 普段目にする動物はそれぞれ特色があり、そこからそれぞれの動物を判別できるが、麟だけは判別できない（「不可知」）。

第四段 判別できないならば（「不可知」）、「不祥」と言うのももっともなことである。

第五段

麟は不祥ではあるが、麟は「聖人」のために出てくるのであり、聖人も麟であることを必ず判別する（「必知」）から、麟は「不祥」ではない。

第六段

麟が麟である所以は「徳」に応じる能力があるからであって、「形」は問題ではない。だから、聖人がいないのに麟が出てくるとしたら、「不祥」である。

第三段は、前段の「不可知」を再度強調し、第四段は、前段まで続いていた「麟」の流れを転じて、「不詳」を前面に押し出す。『指南』は、文の流れを転じる重要な文を一段として独立させていることがわかる。第五段は、前段に反論を加えて、麟は聖人のために出てくるので「不祥」ではないといい、しかし、第六段では麟は「徳」に応じて出てくる、聖人がいないのに出てくるとしたら「不祥」であると、為政者に徳の必要なことを暗に示す。それ故、『指南』では、その冒頭の「麟之爲靈昭昭也」の傍らに圈点をつけて「靈狀徳字」と評説するのである。

ところで、『指南』では「獲麟解」を「六十六則」のうちの「竿頭進歩」に分類している。『關鍵』の評説の「百尺竿頭進一步」を踏まえていることは明かである。『指南』の帰有光の評は次のようにいう。

震川云、文章於結末處最嫌軟弱。又須要百尺竿頭更進一步。如畫工書畫、愈出愈奇、方爲妙手。如此篇可以爲式。

『關鍵』は文の組立や造語について簡潔に評説するだけであるが、『指南』はキーワードに圈点や傍点、二重傍線を付けながら、内容に

まで踏み込んで文の構成を分析批評している。明らかに『關鍵』よりも分析・評説方法が進化している。

五 『關鍵』『指南』の成書年

『關鍵』と『指南』は何時編纂されたのか。

今日見ることのできる『關鍵』はすべて二卷本であるが、『宋史』芸文志では「呂祖謙古文關鍵二十卷」とある。卷数の違いについて、『四庫提要』は、『宋史』芸文志の誤記という。

考宋史藝文志、載是書作二十卷。今卷首所載看諸家文法、凡王安石蘇轍李廌秦觀晁補之諸人、俱在論列。而其文無一篇錄入、似此本非其全書。然書錄解題所載、亦祇二卷、與今本卷數相合。所稱韓柳歐蘇曾諸家、亦與今本家數相合、知全書實止於此。宋志荒謬、誤增一十字也。

すでに「はじめに」にも述べたように、遡り得る版本としては明代刊がもっとも古い。明刊本の序は鄭鳳翔が書いているが、この人物については今のところ不明である。明刊の静嘉堂本には、蘇軾の「留侯論」が集録されていない。

徐樹屏本は目録に「雜說四」が載っていない。目録の前に嘉定の張雲章漢瞻の序、重刻の凡例が付き、「古文選」の後に兪樾の謹書、失姓氏の旧跋、徐樹屏の謹跋がつく。「古文選」のそれぞれの文は、資料①のように、宋の蔡文子注、清の徐樹屏の考異が割注されている。評説部分に文字の異同は若干あるが、二刻は基本的には同じといえる。

『指南』の手稿本とされるものは序文などいっさいない。『提要』卷三十九に拠ると、旧本では帰有光の編と題されていたが、もともと書名はなく、帰有光が登第したのち南海知縣詹仰庇に授け、仰庇が友人の黄鳴岐に授け、鳴岐が校勘して刻した、そのときこの名を題したのだという。

舊本題明歸有光編。：是書前有舊序稱原無書名。有光登第後、授其同年南海知縣詹仰庇。仰庇以授其友黃鳴岐。鳴岐校而刻之、爲題此名。然此實鈔本、非其原刻。

体裁は、すべて「六十六則」に分けられ、左伝から明に至るまでの文百十八篇を録し、毎則毎篇にみな評説があるという。「六十六則」は第一節に挙げた(A)の「論文章體則」に当たる。手稿本も六十六則ある。しかし、集録されている文は百二十篇である。

凡分六十六則、由左傳以下迄於明、錄文百十八篇、每則毎篇、皆有評説。而以總論看文字法冠於卷端。閒雜以駢體。如北山移文歸去來兮辭之類。

卷頭に「總論」「看文字法」があるのも手稿本と同じである。すでに『提要』のころの版本は手稿本とされるものと同じであったことがわかる。

二書の字句の違いは、時代の先後からすれば『關鍵』が先にあって『指南』が改字したということになる。しかし、第二節の⑦から、『指南』は帰有光がみずから書いたものではないことが明かであり、また(C)の結果から、帰有光ではない誰かが『關鍵』の巻頭部分を流用

して『指南』を編纂したことが推定できる。

明代には偽作が多いことから、あるいは『関鍵』の巻頭部分も偽作の可能性もある。崑山や嘉定で帰有光の講義を受けた人が、『関鍵』と『指南』の出版等に関わっていたと考えることもできる。しかし、静嘉堂本の序を書いた孫応鰲は、貴州清平の人、嘉靖三十二年の進士で、崑山や嘉定とは関係がなさそうであり、徐樹屏本つまり重刻『関鍵』は、徐乾学が所蔵していた宋の版本をもとにして誤謬を正して上梓したものであるというから、それを信じるならば、すでに宋刻に「巻頭部分」があったと思われる。

徐樹屏本の出版に尽力した張漢瞻（雲章）は、その跋文に、『関鍵』は『文章正宗』『文章軌範』のような古文の選集を編む端緒を開いた、しかし『関鍵』は今はまれにしか見られないという。

有宋一代、文章之事盛矣。而集録古今之作傳於今者、僅三四家。

夫亦以得其當者鮮哉。眞西山正宗、謝疊山軌範、其傳最顯。格製法律、或詳其體、或舉其要、可爲學者準則。而迂齋樓氏之標註其源流、亦軌於正、其傳已在隱顯之間。以余考之、是三書皆東萊先生開其宗者。東萊呂氏關鍵一編、當時多傳習之、今世見者或罕矣。使竟隱而弗彰、不重可惜邪。…崑山徐君敬思、司寇先生季子、稟其家學、好古尤篤、舉是編而重加讎校、付之剞劂、以廣其傳。學者翫心於此而有得焉。徐季子之爲功於斯文不少矣。

徐乾学・徐樹屏は崑山の人であり、張雲章は嘉定の人である。崑山と嘉定はともに帰有光が講学した地であるから、徐樹屏や張雲章が

『関鍵』と『指南』をともに編纂したとするならば問題は一気に解決する。しかし、すでに孫応鰲の叙を付した静嘉堂本『関鍵』が存在し、しかも「巻頭部分」がある以上、徐樹屏や張雲章が偽作したとは考えられず、誰かが『指南』を作るときに『関鍵』を流用したと考えるのが穏当である。

『指南』に関わったのは、『提要』に拠れば詹仰庇とその友人の黄鳴岐であり、特に出版に関しては黄鳴岐が中心になっていたらしいので、黄鳴岐が『関鍵』を流用したもっとも怪しい人物ということになる。

詹仰庇は、字汝欽、号咫亭、安溪の人。帰有光と同じ嘉靖四十四年（一五六五）の進士で、南海知県、御史などを歴任した。⁽¹⁵⁾ 帰有光の墓誌銘を書いた王錫爵とも交流があった。黄鳴岐は、詹仰庇の友人ということであるが、詳しくはわからない。今後の調査に待ちたい。

おわりに

南宋時代は古文の地位が確立し、『古文関鍵』や『文章正宗』『文章軌範』などの古文の名文集が編集された。これはもちろん古文を読むためのものでもあったが、どちらかと言えば、科挙の受験勉強のための模範文例集として編集されている。⁽¹⁶⁾ これらを読むと、論の立て方や展開の仕方、文章の書き出しや纏め方等の構成法や、効果的な言葉の選び方や呼応などの修辞について知ることができる。南宋ではさらに文論や評論が盛んになり、『文則』や『文章精義』が著されている。前者は、文法や句法・文体を簡潔に論じ、また経伝を評し、後者は古

来の文章を評論している。

元では四六や賦も含めた文章の法則を論じた『文章欧冶』が撰せられ、明では文章法を論じた『文章薪火』をはじめ、古人の論文の法則とすべきものを集めた『文章一貫』が編せられている。『文章一貫』は、上巻は立意、氣象、篇法、句法、字法に分けられ、下巻は起端、叙事、議論、引用、譬喩、含蓄、形容、繳緒に分けられ、文章創作が体系的に把握できるようになっている。明代では、文体を論じること⁽¹⁷⁾も盛んで、『文章弁体』『文章弁体彙選』『文体明弁』などが編纂され、『唐宋八大家集』も編集された。

古文見直しのなか、古文の名手とされる帰有光の『文章指南』は、とくに清の桐城派にとって帰有光の存在を高めるための重要な書であったことであろう。しかし、これまで述べてきたように、『指南』は帰有光の著作とはとうてい考えられない。帰有光は科挙のためだけの作文練習を否定し、科挙に必須の八股文ではなく古文を学生たちに教えた。その内容は、第四節で指摘したようなキーワードによる文章分析であり、それが『指南』のもとになったことは確かである。

『提要』に従えば、帰有光はそれらの講説を纏めて草稿を書き、それを登第したのち南海知縣詹仰庇に授け、詹仰庇が友人の黄鳴岐に授け、黄鳴岐が校勘して『文章指南』と題して出版した。これが、『指南』の旧本ということになる。しかし、『提要』は、それは原刻本ではなく、手稿本も旧著のままではない、と帰有光の著作であることを否定した。一方、『指南』を帰有光の著作とする呂新昌氏に従えば、

整齊された手稿本が登第の時点ではすでにできていたことになる。二説は真っ向から対立するが、内容を吟味してみると、手稿本『指南』は構成面も作者批評もすべて『関鍵』と同じであり、帰有光の嫌った剽窃が行われている。これではとうてい帰有光の著作とはいえず、手稿本とされてはいても帰有光の真筆とは考えられない。帰有光が登第する頃には『指南』の草稿はあったと推測はできるが、それを手稿本のように纏めたのは帰有光の死後であったはずだ。なぜなら、もし、生前のことであれば、剽窃など帰有光自身決してせず、人にも許すはずがないからである。恐らく『指南』としてまとめたのは詹仰庇・黄鳴岐で、そのおりに『関鍵』を流用したのであろう。

それでは手稿本は誰が書いたのか、黄鳴岐はどのような人物であったのか、黄鳴岐以外には誰が『指南』に関わったか。これらについては今後のさらなる調査が必要である。

注

- (1) 新編中国名人年譜集成第十輯（台湾商務印書館、一九八〇）七九頁。
- (2) 台湾中央図書館蔵。影印本が一九七二年に台湾廣文書局から出版されている。
- (3) 王錫爵撰「明太僕寺寺丞歸公墓誌銘」、錢謙益撰『列朝詩集』小傳、『明史』等。
- (4) 『四庫提要』卷三九に次のように云う。
舊本題明歸有光編。……是書前有舊序稱原無書名。有光登第後、授其

同年南海知縣詹仰庇。仰庇以授其友黃鳴岐。鳴岐校而刻之、爲題此名。然此實鈔本、非其原刻。凡分六十六則、由左傳以下迄於明、錄文百十八篇、每則每篇、皆有評說。而以總論看文字法冠於卷端。閒雜以駢體。如北山移文歸去來兮辭之類。蓋鄉塾教授之本、殊不類有光之所爲。考舊本震川集末、有其族孫泓跋語、稱有光選韓柳文有刻本。爲俗人攙改、非復原書。又王懋竑白田雜著、有跋歸震川史記一篇、稱所見武陵胡氏桐城張氏諸本、迥乎不同。且稱有光文集爲其後人刪改、至見夢於坊人翁某。況此點次本子、獨存其家、豈無所增損改易云云。是有光手定之書、尚且全非其舊。則此晚出選本、不足爲信。

(5) 呂新昌著『歸震川及其散文』(文津出版社、一九九八)一〇一〜一〇二頁。

『文章指南』一書、『四庫提要』斷定「不類有光之所爲」、是根據「有光手定之書、尚且全非其舊、則此晚出選本、不足爲信」來推論的。這樣的推論、是想當然耳的說法、可以說是毫無證據。按有光在安亭講學二十多年、從該書的內容看、應該是他講學的教本。故是書縱非震川手著、但起碼也是學生所記、而內容就是震川所講授的。

(6) 拙論「歸有光の『文』理論と古文の修辭法——『文章指南』よりみた——」(国士館大学文学部人文学会紀要第三二号、平成一年十月)ですでに指摘した。

(7) 『四庫提要』卷三八に云う。

此本爲明嘉靖中所刊。前有鄭鳳翔序。又別一本所刻、旁有鉤抹之處。而評論則同。

(8) 淮海孫心鰲の「刻古文關鍵叙」がついている。

(9) 内閣文庫、東大総合図書館蔵。

(10) 『金華叢書』二六九・二七〇冊。この本は『圖書集成』一八二一にも収められる。

(11) 『關鍵』は、上下二巻に分けられ、『指南』は、「仁集」「義集」「禮集」「智集」「信集」の五巻に分けられる。収載される作品を作家ごとに分類すると、次のようになる。『關鍵』では何巻、『指南』では何集に収載されているかも示す。作者は五十音順である。尚、作品名は目録に拠らず、「古文選」に拠ったものもある。

作者	作品名	『關鍵』	『指南』
王禕	国策 酒味色論		礼
王禕	四子論		礼
王禕	文訓		礼
王禕	樗隠記		信
王禹偁	待漏院記		義
王守仁	博約説		仁
王守仁	象祠記		仁
王守仁	尊六経論		礼
王守仁	春王正月論		智
王守仁	龍場生問答		智
王守仁	読孟嘗君伝		智
王守仁	玩易窩記		智
王守仁	送毛憲副致仕帰桐江書院序		信
欧陽脩	送王陶序	上	義
欧陽脩	為君難論下	上	
欧陽脩	本論上	上	

蘇轍	君術		下	
曾鞏	戦国策目錄序		下	仁
曾鞏	唐論		下	
曾鞏	救災議		下	
曾鞏	送趙宏序		下	
宋濂	六経論			礼
宋濂	七儒解			礼
宋濂	閱江樓記			信
張耒	景帝論	下		
張耒	用大論	下		
程頤	易伝序			仁
杜牧	阿房宮賦			信
陶潜	帰去来辞			仁
独孤及	呉季札論			義
班固	異姓諸侯王表			信
范仲淹	岳陽樓記			智
方孝孺	釈統			仁
楊雄	解嘲			仁
李華	政事堂			礼
李觀	袁州州学記			仁
李斯	諫逐客書			仁
柳宗元	捕蛇者説	上		義
柳宗元	種樹郭橐駝伝	上		義
柳宗元	梓人伝	上		義
柳宗元	箕子碑			礼

柳宗元	晋文公問守原議	上	礼
柳宗元	送薛存義序	上	礼
柳宗元	与韓愈論史官書	上	智
柳宗元	桐葉封弟弁	上	智
柳宗元	駁復讎議		信
柳宗元	答韋中立論師道書		信
柳宗元	封建論	上	
呂祖謙	武王伐紂論		信

〔12〕拙論「帰有光の「文」理論——載道と抒情の融合——」（筑波中国文
化論叢2、一九八三年三月）。

〔13〕注（6）拙論。

〔14〕徐樹屏の謹跋に云う。

右東萊呂子古文關鍵上下二卷。久乏雕本。余家自先公司寇藏有宋槧。
……顧其間棗木失真、誤謬頗多。張君漢瞻寢食於古、向爲先公所亟賞。
因請細加勘定。呂子之書、既可爲學文之準、則得張君而刮發幽翳、可
以灼然無疑矣。余之無似、亦曾奉庭訓於先公、遍考宋元以來善本、較
其同異。庶幾佐張君之商榷、以無負先公遺此簡篇焉爾。

〔15〕『明史』卷二二五、列伝一〇三。

〔16〕『文章軌範』は科挙試験の答案作成マニュアルであることが明言され
ている。

〔17〕注（6）拙論参照。

（本学教授・中国文学）